

## タイトル

「PERSONAL MESSAGE」

ジャンル:ヒューマンコメディ

上演時間:約2時間

## 登場人物

野村麻子(35)三友銀行の人事課長。  
岩田陽平(35)新宿メンタルクリニックの精神分析医。  
さつき(47)ゲイバー『紫頭巾』のママ。  
ダンボ(40)『紫頭巾』のチイママ。  
リリィ(32)『紫頭巾』の従業員で、占い好きのオカマ。  
まるこ(27)『紫頭巾』の従業員。  
青山源三(48)お人よしの信用金庫の元行員。リストラされている。  
坂上正人(48)東京大学卒で、三友銀行の元行員。  
浅倉美鈴(28)麻子の部下。  
川崎つかさ(24)麻子の部下。  
本島由紀(25)新宿メンタルクリニックの看護師。  
野村良子(52)麻子の母。

男:7名。  
女:5名。  
計12名。

## 本編

### 第一幕

客入れの賑やかな音楽がF・Oして、クロスして、明かりが徐々にIN。

新宿メンタルクリニックの待合室。

クラシック音楽が静かに流れる空間。

両サイドに階段があり、下手の階段を上がると診察室。上手の階段の上で、クリニックへの出入り口になっている。

下手階段前には、受付カウンター代わりに小さなテーブルが置いてある。

中央にはL字のソファ、その前にセンターテーブルがある。

ソファには、ゲイバー「紫頭巾」のママ さつき(47)と、チイママのダンボ(40)、従業員のオカマで、占い好きのリリィ(32)、まるこ(27)の4人が、メイク

に夢中のさつき以外の3人で、話が盛り上がっている。

まるこ「本当にありがとう！ 全てリリイちゃんの占いのおかげよ！ もう彼ったら、私に超夢中って感じなの～！」

リリイ「やっぱりい！！ 絶対にいけるって思ったわあ！ まるこちゃんってセクシー路線だから、この『ムンムンムレムレ大作戦』思い付いた時、これしかないわって思ったのよ～！」

ダンボ「ちょっとリリイ」

リリイ「何？ ダンボちゃん」

ダンボ「ムンムンムレムレって、その作戦のどこが占いと関係あるのよ」

リリイ「大ありよ！ タロットで出たカードをじっくり観察して、それを参考に、まるこちゃんが彼を罠にはめる為に一番最適な方法を考えたんですもの！」

まるこ・リリイ「ねえ！」

ダンボ「(呆れて)それが『ムンムンムレムレ大作戦』な訳」

リリイ「そう！ いいネーミングでしょ！」

まるこ「響きが最高ね」

リリイ「いかにも罠仕掛けてますって感じが出るわよねえ」

ダンボ「あんた達ね、男落とすのに罠仕掛けてどうすんのよ」

まるこ「あら、それはオカマの基本じゃないかしら？」

リリイ「そうそう、基本。いわばベースってやつよね」

ダンボ「(溜息)あんた達、ろくな恋愛してないわね」

まるこ「失礼ねえ！ 思っきりチャームングでラグジュアリーでジューシーな恋愛してるわよ！」

ダンボ「あんた意味分かって言ってるの？」

まるこ「あつたり前じゃないの！」

ダンボ「じゃあどんな恋愛が、チャームングでラグジュアリーでジューシーなのか、具体的に言ってみなさいよ」

まるこ「しょうがないわねえ、どうしても聞きたいの？」

ダンボ「そりゃ聞きたいわよ、ねえリリイ？」

リリイ「すっごく興味あるわ！」

まるこ「(溜息)分かったわ。…実は、元彼の時の事なんだけど、」

リリイ「ええ！」

まるこ「彼と一週間まるまる連絡取れない時があったのね」

ダンボ「うん」

まるこ「その時、私どうしたと思う？」

ダンボ「こっちが聞いてんよ」

リリイ「お弁当作って、彼の家に行ったとか？」

まるこ「あら！ 惜しいわ！」

リリイ「本当？！」

ダンボ「あんたそれ、思っきり普通じゃないの。どこがチャームングでラグジュアリーでジューシーなのよ」

まるこ「ちゃんと聞いてよ。私は惜しいって言ったのよ」

ダンボ「もったいぶってないで、さっさと言いなさいよ」

まるこ「正確には、その後一週間お店を休んで、彼を24時間べったり陰から付けまわしたの！

ウフ」

ダンボ「ウフって、それストーカーじゃないの！」

まるこ「何言ってるのよ！ 私たちは付き合ってたのよ！ 何でストーカーなのよ！」

ダンボ「付き合っただけがいが、付け回したらストーカーって言うの」

まるこ「だってしょうがないじゃないの！ 携帯切れてるし、家の電話も留守電のままだし、会社で待ち伏せしてたら逃げちゃうんですもん」

ダンボ「全然付き合っていないじゃない」

まるこ「付き合ってたの！」

リリイ「ねえ、お弁当はどうしたの？」

まるこ「もちろん作ったわよ。24時間の付け回して、すっごくお腹が空くの。昔何も持たないまま付け回してえらい目にあつたわ。経験って大切ね」

ダンボ「経験？！ 経験って何なのよ！」

まるこ「ああ、付け回しなんて誰でもやってる事でしょ？ 世界の常識よね」

ダンボ「あんたどこの世界で生きてるオカマなのよ」

まるこ「(可愛く)こ・こっ」

リリイ「いやあ、まるこちゃん可愛い！」

まるこ「そう？ そう？」

リリイ「今の顔だったら、あと男5人はメロメロに出来るはずよ！」

まるこ「え～？！ そう？！」

ダンボ「(溜息)リリイ」

リリイ「何？」

ダンボ「あんたもねえ、当たらない占いで、男を罠に嵌める手伝いするの止めなさいよ。ストーカー被害が出て、うちの店の評判落ちたらどうすんのよ」

リリイ「あら、当たらないってどういう事？ 私の守護霊は、大昔の天才占い師『安倍清明』だって、占い学校のトワイライト・飯島先生が言ってたのよ」

まるこ「『安倍清明』って占い師だったっけ？」

ダンボ「トワイライト・飯島って、その名前だけで充分怪しいのよ」

リリイ「先生の悪口言わないで頂戴！ とってもいい先生なのよ。誰に対しても『あなたはきつと一ヵ月後から、幸運が夕闇のように押し寄せてくるに違いないでしょう』って言ってあげてるんだから」

ダンボ「それ全然占ってもらの意味ないじゃない」

リリイ「あらそんな事ないわよ。本当かどうかは置いておいて、みんな良い事言ってもらいたくて来てるんですもの」

まるこ「ま、そりゃそうよね。『あなたは明日から、不幸のどん底に追い込まれるでしょう』って 言われるより全然良いわよねえ」

ダンボ「結局まるで当たらないって事じゃないの」

リリイ「トワイライト・飯島先生の占いは、ちょっと人生相談みたいなどころがあるのよ。でも私のは違うわよ。完全にちゃんとした占いなんだから」

ダンボ「じゃあ言うけど、あんたがこの通りにやれば、売上10倍は堅いって言った風水は、一体何なのよ」

まるこ「確か、入口にピンクのモワイ像、カウンターに濃い紫のくまのプーさん、トイレに黄緑色の相撲取りだったわね」

リリイ「とってもカラフルよねえ」

まるこ「濃い紫のくまのプーさん探すの大変だったわねえ」

リリイ「うちの店の名前『紫頭巾』に掛けてみたの」

まるこ「やっぱりい？！ だと思ったわ！」

リリイ「プーさんは紫になってもかわいいわね」

ダンボ「店名と掛けてどうすんのよ！ 風水全然関係ないじゃないの！」

リリイ「ダンボちゃん細かい事にいちいちうるさいわ。大丈夫、ちゃんとトイレの相撲取りは、風水で占った結果なんだから」

ダンボ「怖いわよ！ 怖すぎるわよ黄緑色の相撲取り！ 私一ヶ月間トイレ入れなかったわよ！」

まるこ「それでダンボちゃん、この頃便秘気味だったのね」

ダンボ「本当に大変だったわよ」

リリイ「ダンボちゃんったら、意外と怖がりさんなのねえ」

ダンボ「そういう問題じゃないの！ どうして売上が上がらなかったかって聞いてんの！」

リリイ「あれは三ヶ月以上置かなきゃ効果がないのよ。最初にそう言ったじゃない。なのに勝手に一ヶ月で止めちゃうんですもの。ハッキリ言って、文句言われる筋合いじゃないわ」

ダンボ「一ヶ月で、売上三分の一に落ちたわよ」

リリイ「そこを我慢する所に意義があるんじゃないの」

ダンボ「我慢大会やってんじゃないのよ！ 店の経営をしてんの！ 分かる？！」

リリイ「…ママあ！ ダンボちゃんが私の占いにケチつけるのよ～」

ダンボ「はいそこ！ 困った時のママ頼みしない！」

手鏡を手にジッと動かないさつき。皆には手鏡が邪魔でさつきの顔が見えない。

さつき「…」

まるこ「ママ？」

やっと手鏡をはずすさつき。

頬にはくっきり丸いピンクの頬紅。口紅も唇よりも大きくべったりと塗られている。

あまりの顔に、驚く一同。

さつき「(口紅を塗りながら)今口紅塗ってるから待ってて」

まるこ「(何を言っているのか分からない)はい？」

ダンボ「ママ！」

さつき「(口紅を塗り終わり)なあに？」

ダンボ「メイクし過ぎよ」

さつき「あらあ、だって先生にお会いするのよ。このくらいしておかなきゃ失礼じゃないの」

まるこ「(小さい声で)そのままだと逆に失礼かも」

リリイ「ちょっとピンクのモアイ像に似てるわね」

さつき「(鏡を見ながら)そう？ 少しチークが濃かったかしら？」

まるこ「(小さい声で)…チークだけの問題じゃないと思う」

リリイ「(悪気がなく、大きな声で)そうね！ 多分地顔の問題だと思うわ」

さつき「地顔？」

まるこ「リリイちゃん！」

リリイ「なあに？」

まるこ「なあにじゃなくて！」

診察室から、本島由紀(25)の声がある。

由紀(声)「じゃあ先生、そろそろ次の予約の患者さんがいらっしゃる時間ですから」

それに答える岩田陽平(35)の声。

陽平(声)「はい！ 宜しくねえ」

下手の階段から、控え室に下りてくる由紀。

さつきたちを見つけると、ものすごくイヤそうな顔を見せる。

由紀「(溜息)あの」

さつき「なあに？」

由紀「何度も何度も言ってますけど、皆さん方は、全然全く病気ではありませんから」

さつき「ええ」

由紀「ですから、うちの待合室を、おたくの店の控え室代わりに使うの止めてもらえませんか？」

まるこ「あら、隣なんだからケチケチしなくてもいいじゃない」

由紀「ケチとかそういう問題じゃありません」

リリイ「じゃあ、一体何が問題なの？」

由紀「(溜息)うちは、メンタルクリニックなんです」

リリイ「あら、そんなのもちろん知ってるわよ。ねえダンボちゃん」

ダンボ「ええ」

由紀「つまり、精神的にストレスを抱えられた患者さんが大勢いらっしゃるんですよ」

リリイ「大勢来てるの見た事ないわあ」

由紀「(咳払い)そういう方々にとって、あなた達みたいな人が、待合室で占いやったりメイク直したりしているのを見ると、ストレスが倍増するんです。わかります？！」

まるこ「あー！！ 今オカマを差別したわね！」

由紀「してませんよ」

まるこ「したわよ。しっかりしてました！ あなた達みたいな人って言ったじゃない！ あ～あ！ そういう態度、精神医療の現場に携わる者としてどうなのかしら？！」

由紀「違います。そういう意味じゃなくてですね」

まるこ「インターネットの2ちゃんねるに書き込んじゃおうかしら？ 新宿メンタルクリニックの看護師は、差別的発言をしまあずって！」

由紀「(小声で)全くああいえばこういう。だから違うって言ってるじゃないですか」

下手階段の上から、控え室を覗く陽平。

陽平「本島君、ちょっといいかな」

由紀「先生！ この人達、」

突然さっと立ち上がり、笑顔を作るさつきたち。

さつき「あらあ！ 先生～」

階段を降りて来る陽平。由紀を押し分け、陽平に群がるオカマたち。

陽平「さつきさんたちいらしてたんですか」

ダンボ「いらしてましたわあ！」

リリィ・まるこ「私たちもで～す！」

由紀「ちょっと先生！ この人たち、何とかして下さい！ このままじゃ患者さんがいなくなります！」

陽平「まあまあ、お隣さんなんだから仲良くやろうよ」

由紀「そんな甘い事言ってるから、いつまで経ってもこの人たちが」

まるこ「あらあ、そんな事言ってもいいのお？！ 2・ちゃ・ん・ね・る」

由紀「もう！ …先生！」

陽平「はいはい、分かりました。えっと、皆さん今日はどうされたんですか？」

さつき「先生がちっともお店にいらして下さらないからお誘いに来たんです」

陽平「ああ、すいません。あのピンクのモアイ像に圧倒されちゃいました」

ダンボ「リリィ！」

リリィ「…」

ダンボ「大丈夫です！ もうありません！ さっさと撤去いたしました！ 今後二度と置かれる事は  
ありませんから！」

陽平「(ダンボの勢いに押されて)そうですか」

リリィ「先生、ピンクのモアイ像お嫌いですか？」

陽平「(苦笑)嫌いって事じゃないんですけどね」

リリィ「じゃあ好き？」

陽平「いやあ、好きってわけでもですねえ…」

まるこ「先生！ 今日あたりいかがですかあ？」

陽平「今日ですか？」

まるこ「何か御予定でも？」

陽平「予定っていう予定はないんですけど…」

ダンボ「じゃあ、早速お席の方御用意しておきますね」

陽平「そうだなあ…」

SE: 電話のベルが、受付と2階で同時に鳴る。

電話に出ようとする由紀を押しとどめる陽平。

陽平「本島君いいよ。多分武藤からだと思う。ちょっと失礼します」

さつき「お待ちしております」

逃げるように階段を上がっていく陽平。

陽平「(階段をあがりながら)本島君ちょっといいかな」

由紀「はい」

陽平が診察室に入っていくと、すぐに電話のベルが止まる。

由紀「いいですか。次の患者さんがいらっしゃる前に、さっさと帰って下さいね！」

階段を上がり、診察室に消える由紀。

ダンボ「全く可愛げがないわよねえ」

さつき「本当ねえ、今時の若い子って皆ああなのかしらね」

リリイ「ねえ、まるこちゃん」

まるこ「何？」

リリイ「2ちゃんねるってなあに？」

まるこ「リリイちゃん2ちゃんねる知らないの？」

リリイ「全然」

まるこ「2ちゃんねるっていうのは、インターネット上にある巨大な掲示板の事よ」

リリイ「掲示板？」

まるこ「そう！ 結構えげつない書き込みで評判になっててね、人とか店の悪口とか 中傷とか匿名で書いてあって、いくつか裁判にもなってるのよ」

リリイ「(感心したようにうなずきながら)だからなのねえ」

まるこ「何が？」

リリイ「(ニッコリとして)まるこちゃんって、えげつない書き込みとか得意そうなものね」

まるこ「…得意って、あんた…」

ダンボ「リリイって、ボケてんのか突っ込んでるのか、未だに分かんない子よね」

さつき「(苦笑)本当ねえ」

上手の階段から、野村麻子(35)、浅倉美鈴(28)、川崎つかさ(24)が賑やかにお喋りをしながら降りて来る。

美鈴「本当にそんな格好いいわけ？ ここの先生」

つかさ「本当らしいですよ！ 私もまだ会った事なんですけどね」

美鈴「どう思います？ 麻子さん」

麻子「まあ、話のネタになって事でいいんじゃないの？」

つかさ「さすが野村さん！ やっぱ美人はガツガツしないんですね！」

麻子「(苦笑して)何言ってんの。そんなんじゃないの！」

つかさを見つけ、驚くオカマたち。

まるこ「つかさちゃん?!」

つかさ「(驚いて)まるこちゃん！ やだあ！ 皆来てたの?!」

麻子「川崎さんのお知り合い？」

つかさ「私がよく行く『紫頭巾』のオカマちゃんたちなんです」

麻子「紫頭巾？」

つかさ「ええ。こちらさつき…ママ?!」

あまりのどぎついメイクにぎょっとするつかさ。それに気づかないまま、名刺を取り出すさつき。

つかさ「メイク凄くない？」

さつき「(あっさり)普通よ」

つかさ「それで？」

全く動じないまま、麻子と美鈴に名刺を渡すさつき。つられて名刺を出す麻子と美鈴。

さつき「初めまして。『紫頭巾』というバーをやっておりますさつきと申します」

麻子「野村麻子です」

美鈴「浅倉美鈴です」

つかさ「こちらダンボちゃんにリリイちゃんにまるこちゃん！」

ダンボ・リリイ・まるこ「初めましてえ！」

さつき「(名刺を見て)ま！ 三友銀行の人事課長さんでいらっしゃるの?!」

麻子「ええ、まあ」

まるこ「すご〜い！」

麻子「全然凄くないですよ。殆ど雑用係みたいなもんですから」

ダンボ「雑用係なんて、そんな訳ないじゃないですか！」

麻子「(笑い)本当なんです」

つかさ「この先生が格好いいって教えてくれたの、さつきママなんですよ」

美鈴「そうだったんですかあ」

ダンボ「もしかして、つかさちゃんたちも先生見に来たってわけ？」

まるこ「ママ！ 超強力なライバル出現ね！」

リリイ「占う？」

さつき「(苦笑して)いいわよ」

つかさ「私と美鈴さんはずばりそう！」

美鈴「ねえ！」

さつき「麻子さんは？」

つかさ「野村さんは、最近あんまり眠れないって言うから、無理矢理連れて来たの」

さつき「まあ、眠れないんですか？」

麻子「たいした事ないんですけど、川崎さんが絶対病院に行った方がいいって言うもんですから」

つかさ「ついでにうわさの先生見ておこうと思って」

麻子「(笑い)そんな事だろうと思ったわ」

美鈴「こんな事がないと、なかなか生きた精神分析医なんて見れないものねえ」

つかさ「おまけに格好いいんですもんね」

美鈴「お医者さんの上に格好良いなんて、女だったら誰だって興味あるわよね」

まるこ「オカマだって興味津々よ」

まるこ・リリイ「ねえ！」

さつき「あなたたち！ はしたないわよ」



ダンボ「ママ、全然説得力ないわ」

さつき「(咳払い)そうかしら」

2階から由紀が降りてくる。さつきたちを見つけ、わざとらしいほど大きなため息をつく。

由紀「…まだいたんですか」

ダンボ「いたわよ」

まるこ「あんたいいから先生は？」

由紀「先生はお忙しいんです。あなたたちの相手をしてる暇なんか、全然ないんです」

まるこ「あら、このクリニックがそんなに繁盛しているなんて知らなかったわあ」

由紀「(小声で、チッ！ とばかりに)本当にああいえばこういう…」

麻子「あの…」

由紀「はい?!」

麻子「…あの私…」

由紀「ああ！ すいません。6時に予約の野村さんですか？」

麻子「ええ」

由紀「(急に愛想よく)お待たせして申し訳ありませんでした。どうぞこちらに」

美鈴・つかさ「は〜い！」

美鈴とつかさも一緒に診察室に上がろうとする。

由紀「(冷たく)付き添いの方はこちらでお待ちください」

美鈴「えっ？」

つかさ「行っちゃいけないんですか？」

由紀「(当然でしょとばかりに)もちろんです」

美鈴「そんなあ！」

由紀「野村さんだけどうぞ」

麻子「(戸惑いつつ)はい…じゃあ、ちょっと行ってくるわね」

美鈴「え〜！」

つかさ「そんなあ…」

由紀「(さつきたちに)診察の邪魔になりますので、本当〜にさっさと帰って下さい！ いいですね！」

麻子を連れて診察室に入っていく由紀。

美鈴「何あれ〜?! 超感じ悪〜い！」

つかさ「折角来たのにい！」

まるこ「あの女、本当にムカツクと思わない？」

美鈴「思う〜!!! これじゃあ、何の為に来たのか分かんないじゃな〜い！」

つかさ「本当ですよ！」

美鈴「いっつもあんなわけ？」

ダンボ「今日はいっつもよりマシなくらいよ」

つかさ「あれで?!」

さつき「あれで」  
ダンボ「この前なんて私、箒で掃かれたのよ」  
美鈴「箒で?!」  
ダンボ「そう! 酷いでしょ?!」  
つかさ「ひっど〜い!」  
まるこ「今時掃除機じゃなくて、箒ってところがミソよねえ」  
ダンボ「このクリニックに患者が集まらないのは、私たちのせいだって言うのよ!」  
つかさ「何それ〜!」  
美鈴「私が思うに、それはずばり、あのクソ生意気な女のせいね!」  
ダンボ「まあ!!! あんたいい事言うわねえ!」  
まるこ「すっごく気が合いそうな予感がするわ!」  
美鈴「実は私もそう思ってたの!」  
ダンボ「ねえ、早速今日店に来ない? 安くしとくわよ」  
美鈴「行く行く!」  
つかさ「お店、クリニックの隣にあるんですよ」  
美鈴「へえ」

麻子が現れてから、ずっと黙り込んで何かを思い出そうとしているリリイ。

さつき「リリイちゃん?」  
リリイ「何?」  
さつき「どうかしたの? さっきからずっと黙ってるけど」  
リリイ「ん〜…さっきの野村さんだっけ、あの人ついこの間見た気がするの」  
さつき「そう」  
つかさ「どこで?」  
リリイ「う〜ん、どこだったかしらあ…思い出せな〜い…」  
美鈴「いつくらい?」  
リリイ「それも出て来ないのよ〜!」  
まるこ「つまりどこも思い出せないわけね」  
リリイ「(手を喉に持ってきて)ここまで出掛かっているのよお、ああ! すっごく気持ち悪い!」  
まるこ「出てこないものはしょうがないじゃない」  
リリイ「気になるわあ、ちよつとここで占ってみていい?」  
ダンボ「ダメ」  
リリイ「どうしてえ?」  
ダンボ「そろそろ店に戻んなきゃいけない時間だから」  
さつき「あら、もうそんな時間なのね」  
ダンボ「じゃあ、美鈴さんつかさちゃん、あとでね」  
さつき「麻子さんも連れてきてね」  
美鈴「もちろん!」  
まるこ「リリイちゃん、いこ」

リリィ「…」

まるこ「(リリィの背中をぽんと叩き)リリィちゃん！」

リリィ「あ！ 分かったあ！！ 歌舞伎町の『ラブマシーン3』から出て来たんだったわ！」

まるこ「ラブマシーン？」

リリィ「私たまにあの前で、占いの修行しているのよ」

つかさ「ラブマシーン3って何？」

まるこ「ラブホテルよ」

美鈴「ラブホテル？！ しかも歌舞伎町の？！」

ダンボ「あら、誰だってラブホテルくらい行くでしょ？」

美鈴「それはそうだけど…」

リリィ「そう！ 思い出したわ！ その時すごく派手なベルサーチのスーツ着てたの！ 今日と全然感じが違ってたから分かんなかったんだわ！」

つかさ「野村さんがベルサーチ？」

リリィ「そう！ 先週2度も見たの！ しかも2度とも違う男と一緒にだったわ」

まるこ「意外～！」

つかさ「…まさかあ」

美鈴「多分それ、人違いだと思うわよ」

リリィ「間違いないわよ！ 相手の男、元彼と似てたから、確かめようと思ってじっと見てたんだもん」

美鈴「あのね、麻子さんってすごく真面目な人なの。二股掛けるような事、絶対にしないと思うわ」

つかさ「そうですよねえ」

まるこ「あら、人は見掛けによらないって、相場が決まってるじゃないの」

美鈴「(断言するように)ありえない」

つかさ「野村さんに限ってって感じですよねえ」

美鈴「そうそう」

リリィ「でも私、確かに見たのよ」

美鈴「…」

さつき「…(立ち上がり)さっ皆、行くわよ」

ダンボとまるこが立ち上がる。

ダンボ「いけない！ あと20分で開店時間だわ！」

まるこ「やだ！ 急がなきゃ！」

さつき「リリィちゃん」

リリィ「私本当に」

さつき「分かったから」

さつきに促され、洪々立ち上がるリリィ。

ダンボ「じゃああとでねえ」

つかさ「うん…」

さつき「それじゃあ、失礼します」

上手の階段を上がり、出て行くさつきたち。

つかさ「…どう思います？」

美鈴「どうって…」

つかさ「野村さんキレイだから、男も選り取り見取りですよねぇ…」

美鈴「選り取り見取りなのと、二股掛けて歌舞伎町のラブホに行くのは違うと思うけど」

つかさ「そりゃそうですけど」

美鈴「いい？ あの麻子さんが、歌舞伎町のラブホになんて行くと思う？ しかも名前がラブマシーン3なのよ」

つかさ「う～ん…名前は置いておいて、イメージ的にいえば、同じ新宿でもヒルトンとかパークハイアットって感じですよねぇ」

美鈴「でしょ?! 絶対そうよね! ラブマシーンなんてありえないわよ」

つかさ「…(クスツと笑って)美鈴さんって」

美鈴「何？」

つかさ「本当に野村さんの事好きですよねぇ」

美鈴「何それ」

つかさ「違います？」

美鈴「…違わないけど…」

SE: 音楽F・I。

徐々に明かりがF・Oしていく。

つかさ「(笑う)美鈴さんって可愛い～」

美鈴「…馬鹿にしてるでしょ？」

つかさ「してませんよ」

美鈴「絶対にしてる！」

つかさ「してませんってばあ」

美鈴「…どうだか」

暗転。

続きはあらすじ(ホームページ内 <http://www.supercomplex.net>)をご覧ください。